

# まちびと

MACHIBITO

特別号

## 町田を知る

町田で輝く人に出会うコミュニティマガジン

2021 TAKE FREE



古地図を広げて地形などについて話し合う研究会のメンバー

町田地方史研究会

# 地名の意味 後世へ継ぐ

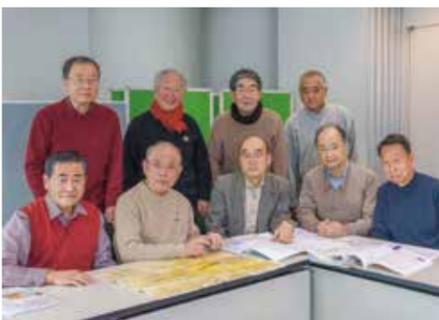
「台、谷、畑などのように土地の形状にちなんだ地名は少なくありません。『くぼ』は崖のある地名に多く、崖崩れのあった土地には『かけ』『びやく』などの地名が見られます。山間の入り口は『おおと』、『みつ』は川の水が満ちる意を表すこともある」

そう話すのは、町田地方史研究会の小島政孝会長。起伏に富む多摩丘陵に位置する町田だからこそ、地形に由来する地名は少なくない。

一方、地元の歴史や伝承についての情報を伝えてくれるのも地名の魅力だ。「小野路の奈良杯(ならばい)の地名は、南北朝時代の武将、新田義貞がこの地で『ならべ』と号令したからという言い伝えがあります」と話す。

郷土を知る上で必要な地名の由来を伝えようと、同研究会は2019年から、「まちだ〇ごと大作戦」の決定を受けて調査を開始。身近にある地名の由来を歴史散歩や講演会を通じて地域住民に紹介し、活動の輪を広げながら呼びかけてきた。

しかし、手がかりはあまりにも少なく、検地のために小字が記されている江戸時代の水帳や、当時の名主が所有していた村絵図など、今も残る数少ない資料を探し歩き、地道に調べ続けてきた。「資料がなく由来の断定ができない地名も多いですが、いろんな見方があるという投げかけがあれば、多くの人が参加し、研究は後世に受け継が



町田中央図書館で定例の会議が開かれている

れるはず」と話す。

1972年設立の同研究会は現在、約80人の会員が活動に参加している。郷土の歴史をテーマごとに掘り下げた会誌『町田地方史研究』を現在までに26号発行、古代から昭和まで活躍した地元ゆかりの456人を紹介する『町田歴史人物事典』も一冊にまとめている。

今年、まちだ〇ごと大作戦「未来へ伝承！町田の地名大作戦」で調べてきた地名の由来を記録する『町田の地名南地区編』を発行する予定。旧・町田町、忠生村、堺村、鶴川村の各地区編の発行も今後、視野に入れている。

小島会長は「今は丁目番地の数字の表記が多くなり、地名に面白みがなくなった。交差点やバス停にある名称が地名であったことを知り、地域に愛着を持つてもらえるような歴史財産を後世に残したい」と話している。



町田10地区

## 地名からまちの魅力を見出す

通学路の信号機に表示されている交差点、近所のバス停、いつも遊んでいる公園。普段見慣れた場所の名前には、昔から伝わる由来があることが少なくありません。

今回の「まちびと」特別号は、まちだ〇ごと大作戦「未来へ伝承！町田の地名大作戦」で実施している「町田地方史研究会」の取り組みを特集します。同研究会は、地域の中の小字(古い地名)を調べ、身近な地名の由来を知ることによって郷土愛を育んでもらいたいと、町内会・自治会連合会の10地区に働きかけ、これまでに相原、小野路、三輪の各地域で講演会や歴史散歩などを行ってきました。

本号は、「町田の地名大作戦」の成果から市内10地区に潜む地名を探ります。地名の由来には諸説ありますが、それを楽しみながらご覧ください。



2018年の市制60周年から、ラグビーワールドカップ2019、東京2020オリンピックへと続く3か年を「未来を見据えた3年」と位置付けて開始した「あなたの夢を実現につなげる」取り組みです。新型コロナウイルスの影響を受け、実施期間を2021年末まで1年間延長しました。

まちびと

MACHIBITO

2021年 特別号

発行日 2021年3月15日

発行 町田市市民部市民協働推進課  
〒194-8520 東京都町田市森野2-2-22  
町田市役所2階  
TEL 042-724-4362

編集部 株式会社タウンニュース社  
〒225-0014 神奈川県横浜市青葉区荏田西2-1-3  
TEL 045-913-1220

表紙撮影 工藤 剛史

- 03 町田地方史研究会  
地名の意味 後世へ継ぐ
- 04 相原地区
- 05 小山・小山ヶ丘地区
- 06 木曾地区
- 07 高ヶ坂・成瀬地区
- 08 忠生地区
- 09 玉川学園・南大谷地区
- 10 鶴川地区
- 12 原町田地区
- 13 町田第二地区
- 14 南地区
- 15 町田かるたプロジェクト  
郷土の魅力 口ずさもう
- 16 町田市地区協議会



この冊子は40,000部発行し、1部あたりの単価は57円です(職員の人件費を含む)

# 小山・小山ヶ丘地区

“ 古代～中世の仏像 歴史伝える ”



小山は、平安後期から室町時代までの仏像が遺されている市内唯一の地区です。平安後期の観世音菩薩立像（福生寺）、南北朝時代の釈迦如来坐像（宝泉寺）、室町時代の不動明王像（中村不動尊）が存在します。もし明治維新での廃仏毀釈で行方不明となってしまう鎌倉時代の阿弥陀像（正明院／廃寺）が残されていれば、古代～中世の各時代で造られた仏像が揃っているという稀有な土地になっていたことでしょう。



福生寺の観世音菩薩立像（町田市立博物館所蔵写真）

## A 三ツ目

道の分かれ目ともいわれていますが、地元の人でも「三ツ目」の正確な由来については分からないようです。地形的に見ると、境川と北側の丘陵地との間に狭まれ、境川が氾濫するとすぐに辺り一面が水びたしになることから、「みつ」（満る）に「め」（場所）のみつめと称し、その危険性を伝えるために生まれた地名とも考えられます。



「三ツ目」バス停

## C 片所

地形から見ると、「かたそ」の地名の由来は「かた」（傾）・「そ」（岨→崖）とされ、急傾斜の崖の多い土地であることを意味しています。片所の地には、春にはホシザクラが可憐な花を付け、夏にはホテルの舞う谷戸が今も残されています。餌をついばみに来るキジの姿も時折見られます。



片所地区

## B 田端

「たばた」という地名は各地で見られ、「田の傍ら」「田んぼの端」と推測されますが、台地の崖線近くに広がっていることから「台地の端」という意味も考えられます。ストーンサークルで知られる「環状積石遺構」もそうした場所に造られています。



縄文時代「田端環状積石遺構」のレプリカ展示

# 相原地区

“ 古代の面影に彩られたロマンの地 ”



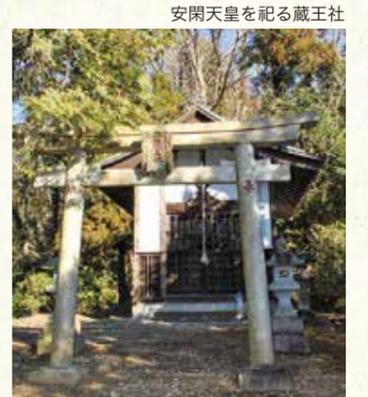
相原とその周辺地域には、高良谷、秦良谷、春日谷といった渡来系・畿内系を思わせる地名がみられます。また、ひっそりとたたずむ未発掘の横穴墓が数多く点在し、古墳時代の安閑天皇を祀った蔵王社、相模国分寺の瓦を焼いた窯跡が出土するなど、古代の面影を伝えています。丘陵や諸社が同じ線に並ぶ軸線が見られるとの説もあり、歴史的背景を知って歩く相原の地は、古代へのロマンをかきたててくれます。

## A 大戸

地形的には山間の入り口を「おおと」と称し、全国各地に見られる地名です。その昔、鎌倉街道と甲州道へ通じる要衝だったため、大木戸番所の備えがあり、地元では大木戸を大戸と呼び、それが地名になったと伝えられています。



鐘楼門のある大戸観音堂



安閑天皇を祀る蔵王社

## C 蚕種石谷戸

国道16号沿いの坂下付近は「蚕種石谷戸」と呼ばれていました。養蚕が盛んだった頃に地元農家の人たちが「蚕の神様」として繭の形をした蚕種石を祀っていたことに由来しています。この石は八十八夜が近づくと緑色に変わり、ふ化した蚕を蚕座に移すように知らせたと言います。養蚕業の衰退後は長らく忘れられていましたが、昭和40（1965）年に地元住民の手で掘り出され、現在は諏訪神社の境外地に祀られています。



繭の形をした蚕種石

## B 真米

「まごめ」も各地に見られる地名で、馬との関連を想起させる馬籠や馬込、急峻な地形を形容した間込など、さまざまに表記されています。相原の場合は、明治時代までの史料には馬込とあるものの、他地域との意地の張り合いから「境川の水の米より、谷戸の真清水で作るわしらの米の方がずっと旨いのだ」と主張して「馬込」を「真米」に変えたといわれています。



崖地を貫く真米トンネル

※明治新政府の神仏分離令（1868年）により起こった仏教の排斥運動



# 高ヶ坂・成瀬 地区

“ 歴史と地形から伝わる地名 ”



高ヶ坂の地名は、原町田に向かう急坂があることから「高い坂のある村」としてそう呼ばれていました。「こがさか」の「こが」は崖崩れの意味があるともいわれています。成瀬は、雨で増水した川の音から「鳴る瀬」と呼び、「成瀬」の文字に変わったといわれています。成瀬の「なる」は一般に山間の平地を指す地名に多いようです。奈良谷戸の「なら」も同じような地形から来る地名と考えられます。

## C 鞍掛 くらかけ

急傾斜地で山崩れの起こりやすい土地に「クラ」や「カケ」の言葉をつける地名は全国に多くみられています。鎌倉攻めの新田義貞が分倍河原の合戦の後、鎌倉に向けて進軍中にこの地で野営、馬の鞍を松の木に掛けて休んだことからつけられた地名との言い伝えもあります。鎌倉時代の御家人、畠山重忠が鞍を掛けたとの説もあります。



鞍掛の松公園にある石碑

## A 三塚 さづか

高ヶ坂・原町田・金森の三村の境界点を示す「境塚」があったことから「さづか」と呼ばれるようになりました。

## B 牢場 (高ヶ坂石器時代遺跡) ろうば

「牢場」の地名は、谷あいの地形で馬を追い込んだ場所を指す「籠場」という意味と考えられます。熊野神社奥の窪地で、中世の小山田氏支配の時代、馬の牧場の一画だったと考えられます。この場所から大正時代に縄文時代の敷石住居跡が発掘され、「高ヶ坂石器時代遺跡」として市内では唯一の国指定史跡となりました。現在、遺跡を覆い屋で保護し見学できるように整備されています。



写真奥が牢場遺構の覆屋

### かしの木山自然公園

園内では、シラカシやクヌギ、コナラなどの雑木林をはじめ、野鳥や昆虫を観察できる自然あふれる散策を楽しめます。玉川学園・南大谷から鞍掛にかけて古道の跡ともいわれる尾根道が通っています。



園内の自然観察館「森の家」

町田市西成瀬3-9 042-724-1660



# 木曽 地区

“ 大山道の宿場町 ”



木曽の地名は、源平合戦の主役だった木曾義仲の子、義高に由来すると伝えられています。また、昔からの木曽の住民は境川近くに住んでいたことから、崖や傾斜地を表す「きし」が転じたとも考えられています。江戸時代には、小野路に並ぶ大山街道の宿場町として栄え、木曽には上宿・中宿・下宿が連なりました。一里塚や上宿の名称がその名残を今に伝えています。

## C 上宿 かみじゅく

宿場は、五街道や脇往環で人馬の継立や宿泊機能を果たす集落でした。木曽村には上宿・中宿・下宿があり、上宿は根岸村に接する一番北側に位置していました。『新編武蔵風土記稿』には、中宿は本村(木曽村の小名)にあったと記されています。

## A 木曽の一里塚

江戸時代、旅行者の目印として大山道に面した木曽の横町に築られました。当時は街道の両側に塚がありましたが、現在は西側のみが残っています。塚の上には、武蔵御嶽山の大口真神の小祠が建てられています。昭和44(1969)年、町田市指定文化財に指定。一里塚は小野路にもあります。



木曽の一里塚

## D 滝の沢 たきのさわ

町田街道と高低差が10mほどあるすり鉢状の谷戸で、崖下から湧き出した水が恩田川の支流の水源になっています。地名からは、かつては雨が降ると、滝のように水量が多かったと想像できます。平成23(2011)年に滝の沢源流公園が整備されました。



滝の沢源流公園にある水源

## B 箭幹八幡宮 やがらはちまんぐう

源義家が奥州征伐の帰路、ここで病にかかり、八幡宮のおかげで平癒したので、屋根に矢を挿したと伝えられています。寿永2(1183)年、木曾義仲が源頼朝と和解のため、その子・義高を鎌倉に派遣したところ鎌倉に入らず、この地に留って八幡宮を再建したと伝えられています。



箭幹八幡宮



# 玉川学園・南大谷地区

“ 学校、駅、地名が一体化 ”



南大谷村は、古くは本町田村に属していましたが、分立して一村となった地域です。明治初期までの村名は「大谷村」でしたが、明治11(1878)年に郡区町村制が敷かれて南多摩郡に属した際、同郡内の八王子にも同名の大谷村があったため、それよりも南にあったことから「南大谷村」と称するようになりました。

玉川学園地区は、小原國芳が本町田の土地を購入し、昭和4(1929)年に学園を創立すると共に宅地分譲にあて、玉川学園駅も開設しました。昭和42(1967)年の表示改正で、本町田・南大谷・成瀬・金井の一部が「玉川学園」になりました。学園名、駅名、地名が統一されているのは他に例を見ません。



南大谷天神社

## A 京塚

きょうづか

小田急小田原線のトンネルの上辺りに「京塚」と呼ばれていた場所があります。「キョウヅカ」(経塚)は一般的には経文を収めた経筒を埋めた塚を言います。一方、横浜市・川崎市・町田市の3市の接点になっている玉川大キャンパス内にある3市接点のメダル所であり、大学構内の道路にはそれを示すメダルが埋め込まれています。古くは、奈良村、岡上村、本町田村の3村の接点の地でもありました。そのためキョウヅカは「境塚」で、3村の境を示す境塚(サカイヅカ)のあった所とみられます。



玉川大キャンパス内にある3市接点のメダル

## C 舟橋

ふなばし

『新編武蔵風土記稿』にある「大谷村」の項には、舟橋について「中央なり」と記されていますが、実際は南に寄った所がそう呼ばれていました。「舟橋」という橋があったことによると考えられます。南大谷中学校裏の恩田川にかかる、現在は「坂下橋」と呼ばれている橋の辺りにあったと推測されます。舟橋とは、舟を並べてその上に板を渡し、橋としたものをいいます。

## B 芝生

しばお

かつては、現在の玉川学園前駅を中心とした周辺一帯が広く「芝生」と呼ばれていました。その名の通り、草や林に覆われた丘陵地で人家はほとんどありませんでした。現在は落ち着いた住宅地に整備されています。



芝生と呼ばれた玉川学園前駅周辺



# 忠生地区

“ 忠臣の武士を称える美名 ”



明治時代の町村制施行により、上下小山田・図師・木曾・根岸・山崎の六村が合併して忠生村が誕生しました。新たな村名を決めるにあたり「木曾」「小山田」などの案が挙げられました。しかし、南北朝時代の湊川の合戦で、新田義貞の身代わりで戦死した忠臣・小山田高家の出生地であるという故事から、「忠生」村に決まりました。明治期の漢学者で下小山田村の若林有信の発案でした。

## C がにやら谷戸

広い湿地が奥まで続く谷戸の地形で、谷戸池には湧水があり、一帯は「ガニヤラ谷(やと)」と呼ばれていました。『新編武蔵風土記稿』にも「蟹原」と記載されており、「サワガニのいる原っぱ」が地名の由来であると推測されます。現在は忠生公園となり、谷戸の自然が保存されています。



忠生公園の自然観察園

## A 図師

ずし

白山権現別当の大蔵院が堂の修復を領主に願い出た時、社地の景色をことごとく図にして提出しました。領主はその図がとてもよくかけているのに感激し、「図師の法印」との称号を与えて白山社領を寄付しました。そのためこの地を図師と呼ぶようになったと伝えられています。



芝溝街道の図師宿

### 名所散策

#### 忠生がにやら自然館(忠生公園内)

忠生公園の自然についての案内や展示、また自然観察会や小中学生の環境教育に関する校外学習にも利用されています。



忠生がにやら自然館

町田市山崎町1804-1 042-792-1326

## B 馬駈

まがけ

付近は狭い谷で急な斜面なので崖地に由来する地名と推測されます。一方、鎌倉幕府の御家人だった小山田氏の支配地で、調練場・牧場・牢場・的場など馬に関連する地名が多くあることから、「馬駈」の地名も馬を走らせたことにちなんでいるとも伝えられています。



馬駈の近くにあるかぶと塚公園



# 鶴川地区【小野路】

“ かつての宿場町 里山を今に伝える ”



奈良時代の勅旨牧であった「小野牧」(現在の多摩市を中心とした地域)があり、そこから多摩郡小野郷へ通じる道であるとの意味で「小野路」となったと推測されます。その後は、鎌倉道や大山道の宿となり、応永10(1403)年の小野神社の鐘銘には、小野路が宿場だったことが記されています。現在は、市内で昔ながらの里山の風景を伝える貴重な場所になっており、歴史・自然・文化に触れられる拠点施設である小野路宿里山交流館があります。

## C 滝山

たきやま

小野路川に落差があり、滝になっていた所の向いの山であるので滝山とされました。滝は現在、暗渠(地下水路)になっています。

町田の歴史を調べてみよう

### 自由民権資料館

自由民権資料館は「自由民権運動」を柱に据えたテーマ館で、町田を中心に多摩・神奈川の民権運動関係史料を収集、研究をしています。常設展示や企画展示のほか、講座などのイベントを行っています。



野津田町897番地 042-734-4508

※天皇の勅旨によって設置された国有の牧場

# 鶴川地区【三輪】

“ 鶴見川の水をめぐる地名 ”



原野が開墾された頃、東南部を「台野」、西北部を「御裔野(みすえの)」、北部を「藤桑生野」と呼び、総称して「三野輪」と呼ばれていたようです。天正年間(1573~1592)に三輪村になり、大和の三輪明神を勧請したと伝えられますが、確かではありません。一方、「水に囲まれたところ」という「みのわ」の意味からすれば、鶴見川の氾濫原に由来する地名かもしれません。そういった場所なので、旧河川の恩廻公園の地下は巨大な調整池になっています。

## A 精進場

しょうじんば

古来より雨降山といわれ、雨乞い信仰の中心だった大山へ参拝する時、精進場橋のもとで身を清め、雨乞い神事が行われました。岡上の東光院の修験が修行した場所とも考えられます。上三輪では精進場橋、下三輪では四ツ木橋付近で雨乞いが行われていたといえます。



精進場橋

## B ドロドロメキ

川の水音にちなんだ地名と考えられます。鶴見川の流量の多さと氾濫の恐ろしさが想像される地名です。現在も「ドオドオ」という呼称が地元で使われています。

## C 四ツ木橋

よつぎばし

四ツ木は「世継」とも書きます。廣慶寺の本尊である世継観音像は四ツ木橋のたもとの川中より発見されたとの伝承があります。古い地名のひとつに「御裔野(みすえの)」があり、「裔」は血筋や子孫を意味することから「世継」という地名につながったのかもしれません。

恩廻公園



### 名所散策

#### 三輪の森ビジターセンター

豊かな自然を残す「三輪緑地」は、さまざまな野草を楽しむことのできる散策路と下三輪横穴墓群などの史跡を大切に保存しています。散策の拠点としてビジターセンターがあり、郷土資料の展示室もあります。



町田市三輪町740 042-724-4399



にほんの里100選に選定された奈良杯谷戸の風景

## B 関屋

せきや

鎌倉古道と布田道が交差した場所で切通しになっています。関所があったので関屋という地名になったといわれています。



関屋の切通し



# 町田第二地区

“ 歴史は長く、地名は新しい ”

安土桃山時代に発祥した本町田村と江戸時代に生まれた森野村、昭和40年代の新住所表示で誕生した中町と旭町によって構成されています。森野村は、古くは「森村」と書いて「もりむら」「もりのむら」と呼ばれており、江戸時代に「野」をつけて称されるようになりました。



## C 井出の沢

水が湧き出る沢だったことが地名の由来。本町田の菅原神社の境内にその面影があります。建武2(1335)年、鎌倉幕府執権だった北条高時の子時行(ときゆき)が信濃で拳兵し(中先代の乱)、この付近で足利軍と大激戦。短期間ですが、鎌倉を奪還しました。「井手の澤の戦い」の記念碑が菅原神社境内にあります。



井手の澤記念碑

### 名所散策

#### 子ども創造キャンパスひなた村

町田市子ども創造キャンパスひなた村は小高い丘(標高105.8m)にあり、広場やカリヨンホール、屋外炊事場などの施設があり、子ども、団体の活動の場として利用されています。一般の方向けの利用やイベントも行われています。



カリヨンホール

町田市本町田2863 042-722-5736

## A 今井谷戸

今井谷戸は七国山のふもとにあり、恩田川の源流の一つがあります。ここに「めいめい谷戸」と呼ばれる地名があり、めいめい谷戸が転化して今井谷戸になったと考えられます。室町時代の文書によると、かつて今井四郎という武士が支配していた「山崎郷内今井村」が大山寺に寺領として寄進されています。現在の「今井谷戸」はこの今井村の名を残しています。



今井谷戸の現在の風景

## B 勝負ヶ谷戸

南北朝時代の井出の沢合戦で、侍大将が一騎打ちをしたと伝えられています。現在は「本町田勝負ヶ谷公園」にその名を残しています。



本町田勝負ヶ谷公園



# 原町田地区

“ 二六の市から発展した商の街 ”

天正10(1582)年に秣場<sup>※1</sup>であった原野を開墾した人々によって町田村が分かれ、原町田村と本町田村が生まれました。原町田では市が立ち、浄運寺から勝楽寺に至る約1kmの通り沿いに毎月二のつく日に、のちに六の日にも開かれました。生糸の売買が盛んになった幕末・明治の時代に、原町田の商業は飛躍的に発展し、横浜線の開通に伴って近隣地域の商業の中心地となっていきました。



## D 永田横丁

原町田2丁目の小さい路地。医師の永田文造が開院していました。

## E 仲見世通り

原町田4丁目。昭和22(1947)年に国際マーケットとして発祥しました。戦前の二六の市では古着市が開かれた場所でもあります。

## F 金森山宗保院

曹洞宗の宗保院は天文11(1542)年に開山。現在の原町田1丁目にあり、周辺は寺町と呼ばれました。<sup>※2</sup>山号に金森の地名が付いていることから、この寺ができた頃は原町田村ではなく金森村の土地だったのかもしれませんが。



金森山宗保院

※1 馬や牛の飼料とする「秣」を刈り取る草地  
※2 寺院の称号で、所在する山の名前などがつけられている

## A 大和横丁

原町田大通りにあった横丁名のうち現在も看板が見られる唯一の横丁。現在の原町田4丁目。原町田で武藤佐太郎が酒造業を営んでいた跡地を、木曾の大和屋が明治41(1908)年に購入し、大和座を建てました。その後、二列に向かい合わせの棟割長屋を造り商店に貸して大和横丁と呼ばれました。



大和横丁

## B 川田横丁

原町田4丁目と6丁目の境界の道路。明治中頃創業の川田酒造がありました。現在の町田ジョルナ、元さいか屋の辺り。

## C 塩屋横丁・石屋横丁

原町田4丁目と6丁目の境界の路地。明治時代は屋号が塩屋という三橋吉五郎の店がありました。大正期に南大谷の佐藤政五郎商店(精米・製粉・肥料)が店を構えました。清川村から城所という煤ヶ谷石工が来住し、大正期には石屋をしていたので石屋横丁とも呼ばれました。



## 町田かるたプロジェクト

### 郷土の魅力口ずさもう



本町田遺跡公園に集まったプロジェクトメンバー

試作中の読み句「古代の世家の復元 本町田遺跡」は、遺跡公園に再現された竪穴住居を紹介。「小山川城跡に建つのは大泉寺」は鎌倉時代の御家人、小山川氏の城があることを伝えている。「狸行く かの木山の地下トンネル」と、成瀬のタヌキ

町田かるたプロジェクトの須藤晏男代表は、かつて遊んだ「上毛かるた」の読み札を大人になった今でもそらんじることができる。「群馬県民の誰もが小学生の時にこの郷土かるたを暗唱し、地元の歴史や文化を誇りに思うんです」とにっこり。「まちだ〇ごと大作戦」の決定を受け、プロジェクトは2020年にスタート。元教員ら約10人の有志と協力し、市内で誇るべき歴史や文化、自然などを遊びながら学べる郷土かるたを制作している。

読み句の文案を担当する元鶴川第二中学校長の千田実さんは「五七五の17音で史実に基づいて背景まで作文するのはなかなか難しい」と苦笑い。44の読み札の推敲をメンバーと重ねているところだ。子どもでも親しめるよう読みやすさに配慮し、読み札の裏側に句の解説文も添えるつもりだ。



群馬県の上毛かるた

トンネルを読んだものもある。須藤さんが町田の魅力に気づいたのは、会社経営を定年でリタイアしてから。多摩丘陵やなすな原遺跡、小野路宿など地元への成り立ちを学ぶ楽しさを知ったという。メンバーの大谷光雄さんも「教科書に載っていない知られざる地域の歴史が町田にもたくさんある。かるたは文化的基盤を市民で共有する良いきっかけになるのでは」。絵札は、玉川大学芸術学部が学生にデザインを依頼し、21年度から本格着手する見通し。プロジェクトは市内全小中学校への配布を考え、年内までにかるたを制作する予定だ。

元南大谷小学校長でメンバーの西岡郁雄さんは「地域を学ぶ資料教材はあるが、子どもが口ずさんで暗唱できるのがいい。町田の魅力をぱっと口に出せるようになって」と話している。



## 南地区

昔話の地をたどる



鶴間から小川、成瀬にかけて、古道沿いに昔話や伝説が伝えられ、それにかかわる「なすな原」や「鶴間」などの地名がみられます。また、東海道から武蔵国府を通って陸奥へ行く通り道として古道があったようで、鶴間の「町谷(まちや)」の地名は、平安時代中期の延喜式に官道の駅として記載されている「店屋(まちや)」に由来するとの説もあります。そうであるとすると、南地区は古来の交通の要衝だったと考えられます。

### C 金山橋(迷い橋) かなやまばし

小川の柳谷戸から北に道をとった西行法師は、道端で子どもらと歌問答をして負けてしまい金森の金山橋まで来て道に迷ったことに気づいたので「迷い橋」ともいわれています。金山橋は近くの金山神社にちなむ名前です。鍛冶や製鉄の金屋子神を祀ります。境川の対岸にも金山神社があり、川



西田金山神社

をさかのぼって移住した人々が鍛冶や鉄の技術をもってきたことを感じさせます。金森の地名の由来に関係しているかもしれません。

### A なすな原 なすなはら

小川から成瀬へ下っていくところの平地で、一帯を治めていた齊原(なすなはら)尊綱にちなんだ地名といわれます。なすな長者の娘が夜な夜な通ってくる男を訪ねると三島神社の蛇(神)だったという伝説があります。東急電鉄の電車基地建設にあたり大規模な発掘が行われ、旧石器時代から平安時代におよぶ遺跡が発掘されました。縄文草創期の隆起線文土器や精巧な細工の土製耳飾りなども出土しました。



隆起線文土器

### B 柳谷戸 やなぎやと

夏、弘法大師が柳の杖を突きさすとたちまち根が生えて、涼しい柳の木陰になったという伝説があり、その後、西行法師が鎌倉から陸奥へと向かう途中、



小川柳谷戸公園

その柳の木の下で休息したという伝説があります。古い時代の道筋にあたっていただのでしょうか。

### D 「鶴間」の地名伝説

「つる」は水路・河川など水のある場所を指し、「ま」はその間際の地を表すので、地形が由来になったとも考えられます。一方、源頼義・義家父子が奥州への途中に立ち寄った時、たくさん鶴が舞っているところを見て鶴舞の里だと言ったことから、「つるま」と名付けられたとの伝承があります。

※平安時代の法令集

# 町田市地区協議会

## 地域、もっと元気に

まちびと特別号で紹介した市内10地区では、地域のネットワーク組織「地区協議会」が、さらなる地域の魅力向上や、地域課題の解決をめざして活動をしています。

その活動は、子どもや高齢者の見守り、困りごとの相談やお手伝い、芸術文化のワークショップ、イベントなど、実にさまざま。

町内会・自治会連合会の地区連合会、青少年健全育成地区協議会、民生委員児童委員協議会の3団体をはじめ、小中学校や大学、社会福祉法人、消防団など、各協議会ごとにさまざまな構成団体が連携しています。

**各地区協議会の取り組みは  
町田市ホームページに掲載されています。**

二次元バーコード  
からアクセス  
できます

